

栃書連会報

雪の日

第 8 号

栃 木 県 書 道 連 盟
振替口座 宇都宮5-15222
会 長 七 海 水 明
〒320
栃木県宇都宮市花房 3-2-25
TEL (0286) 34-0622 局
編 集 事 務 局
印 刷 ショウワ印刷(株)

七 海 水 明

「作品に手を触れないで下さい。」といわれ、その声の方を向いた。「さわってみたかったのてつい、あなたはそんな気になりませんか?」. といつてしまった。「私もそう思いますうが今はできません。」ということでした。北大路魯山人、一九一四作の「柚味噌」という横書きの刻字の看板。大きく大きく見えた。よこ一八一、八センチ、たて六三センチの寸法とか。へこんでいるところに指を入れて、噌の曾をおさえたのである。手にとつて見るとか触れてみるという動作はごく自然な動作なのかなと思う。私はこれを刻した

人がのきを入れ、そののみあとに手をあて、これをくり返していった過程のしぐさを味わってみたかったのである。後右に六曲金屏風があった。いかにも輝かしいものに違いはなかった。藤つるらしきものが数本ぶらさがっている。絵かな?と思つたら半神半獣と読むのだそうだと。勅使河原蒼風の作である。この人の流になつた生花展を見たことがある。なるほどと思つたがすぐにそこをよけながら「ずいぶん光っていますね。」といつたら看視の人が「そうですね。」とほんとうらしく言つた。しかし同じ蒼風の作「不動」の二字の

小品に見る生命の躍動にはさすがにこの人という感を持つた。岡本太郎の夢、いつかテレビにうつつた本人の顔、そのしぐさが頭をかすめた。個性がはつきりと出ていふと思はれる点では満点に近いようだ。石川啄木が東川老兄に宛てた書簡を読んだ。「一老兄が生のために御尽し下された候御厚志は何とも感謝の辞なし。米は今夜つきたり。明朝は粥。出した手紙、どれかかれか物になるべく候に付、この文御落手次第一円か二円頼む。……四月二十八日夜とあるだけで何才頃のものか私にはわからないがおもしろかった。平櫛田中九十七

才の「古道少人行」には九十八才の作に比し十才以上と思われるほど気魄に勝るものがみられて時間をかけて見た。奥村土牛の「心」は何ともことばでは言えないというより他ないほど良かった。「墨」という誌にも載つていたので、本物を見たいと思つていたので満足した。「須田刻太」といえば、埼玉県出身とか。かなり変つた画家だそうだが、彼がといつては大変失礼なことになるが、一九〇六年生まれだから何才になられたのか。この人の一字揮毫の姿を写真で見ることがある。四十才位かなとその時に思つた。その姿の生氣と魄力があつたからだろうか。「行」「天地混沌」とか「地獄」など数点の作品が、会場に、しずかに、そしてすごい雰囲気を感じさせた。室内に流れる音楽の響きがまた実によくあつていたのかも知れない。何という曲かは訊くことをわすれてしまった。勿論作者は会場には見えなかった。「わたしはこの生まれだから少しは点数が多すぎたかも知れないが、まだ生きていくからだろうか、昔とは大分空気が変つたからね、その渦中で変幻しているよ。私の心は字に

書くところなんものになる。」その他、中々おもしろいことを言つている。北村西望の書がなかった。どうなっているのかなと思つた。外に出たら雪は止みもう晴れていた。日展の書をこんなに時間をかけてみたことはない。たのしい時の過ごし方をしたいと思ひながら帰路についた。昨年三月の最後の雪の日 埼玉県立近代美術館での文人の書展をみて。



昭和62年5月10日(日)
午前10時〜12時

栃木県書道連盟会員展

批評会

講師 稲村雲洞氏

(今野 雅春)

翠軒流、飄逸、叙情性、伝統の世界を追究しようとしている。筆のやわらかさに負けてしまった。空間を切る線がどうか。側、直筆でつくるという澄んだ世界がいいところを感じられるが、足腰のかまえがどうか。同じようなところをつくらない。力作。

(佐藤 堪)

重厚でボリュームあり力作。曲が動、動と静、少し骨がない。同じことをやらないで部分的に切るか、白を生かすこと。

(齋藤 笙風)

好きな作品。執筆角度で統一とっていい。しかしどこか

(印)のくふうを。

(齋藤 星舟)

よく書いている。明るくいい作品。筆がブラシになっている。最後まで緊張の連続、一行目、迷っている。

(重原 聖鳥)

いき長い隷書、力作。羽織、袴を着すぎたか。もつと遊びを。

(篠原 珠室)

うまい。紙、和画仙、墨(墨滴)、池の水がくさっているよう。墨と紙、悪い。達者、デッサンは確か。テクニク、損している。

(篠崎 守石)

左書きがはやっている。「心」が「止」に見える。印、まげすぎ、冠帽印の意味なし。何のために押すのか? 信念、趣味、生き方、思想などがこもっているならいいが、ない方がよい。

(白石 宙和)

いい作品。やや洒落た文人の作、線がきびしすぎ平板に見える。縁が鋭すぎのため、中の作品が平板になってしまった。構成の上では、洒落た方だ。落款、上に押しすぎ、少し下に押し下。力作、面白い。墨量。

(諏訪 公道)

いい作。上と下の世界の断層

を感じる。明るい作品。遊びと、間の問題だ。

(早乙女 晃楓)

流暢、筆、かたい。骨格が強調しすぎ、流動性に欠ける。紙のため、墨色のトーンが変化ない。手首がききすぎ、もつと素直に。

(高梨 峰鶴)

金文、外に動こうとする求心性あり。角度がきまつた動きで、水平にした方が広がりがでてる、もつと落着いてくる。落款小さく。

(高橋 曰濤)

落着きたい作品。達者。下部、一直線、上変化、最後の点もつと軽く。印、やや大きい。

(高橋 竹瑞)

達者な作。うますぎる、なるべく急ぐな。自分をセーブするところがある。潤みがあり、渴筆あつていい。勉強している。立派。

(中津原 軒陽)

楷書、よくまとめている。余白、字間の問題、この大ききで一字一字に線をふくらませすぎて、全体では緩急、筆圧の変化があつた方が面白い。練度高い。澄みきった線がでると禍がでる。うまい。いい表具だが、枠が強

すぎる。

(長澤 瑞祥)

いやがる仕事を、あえてまとめることは大変難しい。足腰のぐらつきが見られる。背筋がとおっていない。字坐がマスゲーム集団演技の中の秩序を乱すと目立つ。最後よく澄んでいる。

九成宮を歐陽詢が、どんな心境で書いたかを考えながら書くとい。

(七海 水明)

禅の世界、動き大きい。二字にして一字、落款、大きさと位置、これでいいか? 心臓部のどこに押すか大切。表具しよくいい作品。

(成島 北水)

筆のよくきいた練度の高いいい作。筆圧、平地滑走、素直すぎる。なまの線が見える。達者。

(西脇 紫竹)

小品ながらいい作品。「か」から「れ」失敗、「れ」は小さくていい。「か」をばんといつたら、筆が浮く、浮いたら打ちこむ、空間の距離は近い、息が短い。なんとなくあせている。澄んだ作品になる。落款、もつと小さく、少し下げたら。

(窪田 連峯)

一字目まねごと、下部の「朝」



「墨」「郭」、同じで単調、一寸緊張が足りない。篆書作品。

(兼目 悠久)

心の中での骨格はいいが、マチエールの失敗。紙と潤、ぼやけて損、いい作。

(乙川 玄洞)

どんな姿勢、体験、作者の追体験をやること。うまく書いているが、落款でぶち壊し、印のみの方がよかったのでは？ 羅紋筆の生かし方、いろいろ方法がある。二字一筆で書いていい。らせんの統一、最後の字で位置がどうか？

(大谷津 紫水)

うまい曲線多い。丸味あり。「わ」が全体を壊している。運筆の姿勢、異質、余白とついている作品だ。

(小川 仲秋)

線質の複雑さ、円、三角、活動、右の余白をどう生かすか。落款、和洋折衷、実験的な作品は下へ安定感を持たせるか、飛躍性を持つか。土台が安定、いけれども不安定の安定か。安定の不安定かも、考えるとよくなる。練度の高い面白い作品。ガチツとした額、大切。彫刻、版画を見て、衣装をどう考えているか、マッチするため額縁を

どう使っているか考える必要がある。

(小笠原 隆忍)

骨力、筆力、強い。筆脈のコースを工夫するとよい。スケール大きい。空間への働き、書かない余白を生かすと面白くなる。

(癸生川 天遊)

額の枠なし。遠心力を持っていて壁の色にマッチしない。別の制作の方がいい。もつと暗いところならこの作品はもつとでてる。近代詩文面白い。「終生」不自然さがある。ひまわりの「ま」よめるかどうか。ひらがなのあり方を考えるとよい。「ひ」が目立つ、対応するものがあるとい。

(猪瀬 江秋)

加工紙をうまく使い、余白、流れ、境地高い。最後、上部よく澄んでいい。下部、悩んでいる。下部の世界、大切だ。印、左に。いい作、勉強している。

(石川 六濤)

半切、作品が大きい。まわりの白、よく澄んでいる。力作、いい作、よく遊んでいる。最後の「虚」書写体の方が素直でいいと思う。造形的に面白い。「虚」紙のつなぎ目、よくない。白よく澄んでいる。

(石川 焦山)

素直ないい作。しめつぱい、もう少し渴筆を生かすとよい。筆走っている。上と下の空間を断絶している。強調しすぎると不自然だ。

(石川 善克)

燃焼度の高いいい作品。なげやり、広がらずどこかでびしつと最後でしめてゆくとよい。

(伊澤 雲秋)

紙をのんで書いている。もう少し潤いあるといい。狂草でいいが、初めばかりきつい、終りの方も大きくあつていい。

(川上 尚雲)

若々しいいい作品。背筋のよくのびた作品、心の中に半切の世界をよくとらえている。全体の統括力ありい。

(粕谷 東峰)

空海、筆の抵抗を使って書き、下半身、ぐらついた。力作だ。

(川上 大岳)

動き大きい、筆力ある。線に変化を。練度の高いいい作品。筆の弾力性、振幅を。力作。

(川嶋 奈美)

「影」いい、「月」大きすぎ。間をおきすぎる。

(木曾 梅邦)

澄んだいい作品。懐小さい。

白文の印はどうか。達者、相当勉強している。懐、余裕ほしい。全体を見とおした上での余白の生かし方を。

(岸 豊水)

よく書き込んでいる作品。達者、紙と筆との抵抗、ややもやっとした感じ。紙と墨の関係、沈みがあつていい。上と下の断層あり。力作だ。

(新井 幽石)

刀意、堅いものに堅いもので彫って、やわらかいものをだすという逆の実験。やわらか味あつていい。刀意でたらよい。側款、少し黒が勝ちすぎる。間を持つて押ししたら、側款の多くの入れ方を工夫すれば感じが変ってくる。

(赤澤 豊)

何子貞ばりでもないし、飄々としていい。直線ほしい。もう少し墨量、筆圧、強さ、ほしい。流れすぎたか、ポイントが大切。

(秋山 無涯)

郷土のうたでいい。潤みがないので、箇条がきのような感じ面白いが、後半、平板、もつと奥ゆきを。潤渇ほしい。統一のとれたいい作。

(荒井 雅子)

ほとんどかなは散らしが目標

だが、これは散らしをしていない。懐の大きさ、かなの世界で散らしの概念をすて去った漢字とかなの融合をねらった作。

(長嶋 石城)

淡墨、いい。好きな作品。安定、落着きかたがこれでもいいのか？ 印の位置、不適当。

(館沼 天游)

千半よし。墨をすわない加工紙、濃墨でない方がやわらぎがでている。いい作品。

(松本 晃峰)

あせつた表具が悪い。いい作品、悠々と書いている。乱れなし、いい作品。初めと終りの空間、ややきついか？

(渡辺 竹芳)

流れうまい、いい。下の方でかたく疲れる。力作。淡く、骨があつて、簾の奥に鎮座ましますという感じの作品。

(渡辺 竹亭)

裏打ちにうすい、問題。額装の場合、温厚ありいい。厚手の紙の方がいい。

(吉田 竹溪)

迫力あり、華嚴の瀧のよう。旋線の回転で書いている。空間余白の処理を。

(矢野 清月)

花が多いが、「山客」で全体

の流れを壊している。なかなかいい。

(横塚 柳崖)

余白のきいたいい作品。「日当りて」まよった。後の部、統一感異質の雰囲気だ。音楽的な感覚があつていい。印の位置に工夫を。

(矢内 竹華)

一杯一杯に書いている。余白、余裕、つめてつめて書いている。息苦しい、筆圧単調、隅から隅まで充実すぎた。風とおしを。

(矢内 硯風)

一行目を見る、部分的に見る、全体的に見るといろいろな訓練を。八つ裂きにして作品を反省する。一行目好き、二行目一寸さわがしい。

(村田 幽香)

書きなれている。「夢」のところで調子あらたまりすぎ。最後の三文字、委縮してしまった。落款、もう少しあげたら。よく勉強している。いい。

(松本 宜響)

前衛的、部分的にいいが、脈絡、油と水が混り、にごつている。まぜめに近い。「書」いい。「得」いやらしい、無理、文字の字源を知ってほしい。構成の問題、印の位置どうか？

(増山 恭晏)

線の練度ありいい作品。紙と墨との関係で損している。ぼたーとした感じは紙と墨から生じる。

(小川 小石)

優美でいいが、段差？ 色でごまかすの。2、3センチの段差の方がいいと思う。作品はうまい。

(増淵 春雪)

なかなかあか抜けしている。長鋒濃墨を巧みに用いている。息のつまった線、平坦、藏鋒をもっと強くやつたらよかった。

(平石 岳城)

うまい達者、よどみなし。最後、墨が多すぎ、上部きれい。やや力んでるところあり。

(人見 翠苑)

ぎこちなさ、不安さあり。最後一杯に書きすぎ、隅から隅まで書きすぎ。一字ぬくと風とおしよくなる。

(半田 鈔月)

いろいろ考えた面白い作品だが一寸きつすぎ。運筆の必然性どうか？「月」↓「月」、強調すぎた。無理している。印の位置はこれでもいいか。大胆で面白い。カーブ、類型二つ羅列、破って

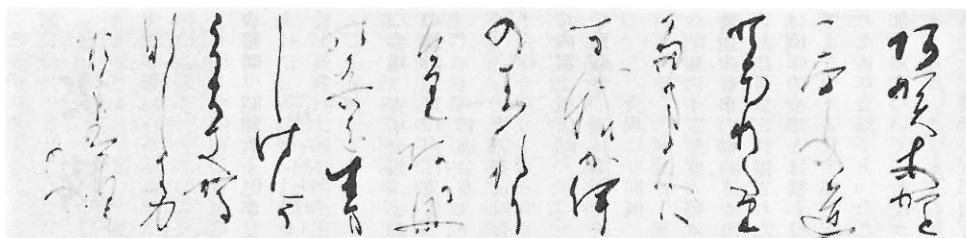
ほしい。

(本多 雨情)

謹厳、つつましか、枯淡、力あり。統一のとれる自信のある作品。デコラチブ(図案化された)変化のポイントを考えてほしい。後ほど重くなる。落款つめなかつた方がいいと思う。テクニクはあり。氷山の一角、どんな栄養をもっているか、疾患を持っているか、面白いところ。

文責 大谷津昭男



連
盟
賞

▲荒井雅子

▼石川六涛

「賞と罰」

賞というものは、よその人のためにあるものと思っておりまして私にとって、連盟賞のおしらせは、まさに青天の霹靂でした。突然のことというものは、少し時間がたたないと身につかないものです。このおしらせもそうでした。

連盟賞をいただいて

何人かの先生やお友達から、お祝いや励ましの言葉を戴いてから、そのよろこびがじわじわと体にしみ渡り、同時に、あの作品が何故？という疑問も湧いてまいりました。そして数日、この賞は、怠惰な私に對し、罰として与えられ

いま、苦しみ喘いでいながらも、漢魏六朝、唐明清の深遠絶妙を觀、特に龍門造像記や、王鐸のほとばしり出る情念の熱さに触れた感激は、苦しみにあまりある喜びである。謙虚に「文字は共有の文化」自分よがりには許さない自戒の思

念の中で、自分の書芸を確立すべく、一步一步、苦渋の坂を登りつめたい。書で、食は考えていない。いまの私にとって、書は生命、魂を昇華する人間形成の手段であると考えている。知故のなかった栃木県書壇で

の、今回の栄誉ある受賞は、毛頭心にありませんでした。清々しい感動です。この喜びを、これからの活力として更に励みたい。関係諸先生に深く感謝申し上げます。

石 川 六 涛

荒 井 雅 子

たものであると結論づけました。誰かの言葉ではありませんが、この世界では「書くつきやありません」そうすることが、この賞に對してのお返しと思ひ、駄婆なりに頑張るつもりであります。今後とも、よろしくご指導下さいます様お願いいたします。

昭和62年度
決算書

収 入 額
1,136,453円
支 出 額
1,135,252円
残 高
1,201円

総 会		123,550円
展 覧 会	会 員 展	204,200円
	女 流 展	57,500円
	顧 問 会	14,740円
会 議	運 営 委 員 会	44,200円
	幹 事 会	70,990円
研 修	実 技 講 習 会	220,762円
	見 学 会	48,900円
会 報		50,000円
通 信		100,410円
40周年記念準備		100,000円
特 別 支 出		100,000円

昭和63年度
予算案

収 入 額
1,351,201円
支 出 額
1,351,201円
残 高
0円

総 会		130,000円
展 覧 会	会 員 展	220,000円
	女 流 展	60,000円
	顧 問 会	40,000円
会 議	運 営 委 員 会	60,000円
	幹 事 会	80,000円
研 修	実 技 講 習 会	200,000円
	見 学 会	60,000円
会 報		60,000円
通 信		120,000円
40周年記念準備		100,000円
会 員 名 簿		220,000円
雜 費		1,201円

実技講習会に参加して

赤澤 豊

○日時 昭和六十二年二月七日

(日)午前十時～午後三時

○会場 青年会館(宇都宮)

○講師 野口白汀先生

(日展会友
東方書道院審査員)

○内容 風信帖

○懇親会 実技講習会終了後同会場にて開催

昭和六十二年、栃木県書道連盟の行事の締めくくりとして、実技講習会が開催された。今回は例年の会場とは変わり、今までより少々JR宇都宮駅から離れた青年会館であったため、参加員についての心配があったようだが、まずまずの集まりであった。講師の野口白汀先生は、洲上艸城氏のお骨折りで、埼玉県熊谷からお越しいただいての実技講習会であった。

講話

各自に資料が用意され、空海の風信帖(最澄に宛てた手紙三通の内の第一通)について、空海像や風信帖の技法を事細かに解説され、その講話には先生の若い頃の苦労話や、書の科学的な研究のことや、書の芸術性などについて、私達に判りやすい講話の中に折り込み、おもしろおかしく、しかも、充実した内容で、アツという間の二時間であった。今、講話の内容を思い起こし、特に思い出されることをいくつか記してみる。

(イ)書は不滅である

某テレビ局で放映した筆圧を科学する器械は、先生が何年も前から、研究に研究を重ねて、編み出したものであると話された。だが、ニジミ、カスレ等は、科学では解決できない。そして書には創造があり、想像がある故、書は不滅ではないかと申された。

(ロ)美的直感

作品を見た瞬間に、いいと感ずる心が美的直感である。これを如何にして磨き上げるかが大切である。

(ハ)書は線なり

線は四次元の世界であり、深さ、時間、リズムによって作り出されるもの、その線には紙を真横から見た時、深さがあり、そして、空間的深さにはリズムがある。

(ニ)一日百枚

先生は若い頃に練習したものを師匠に見て戴きに行くと、師匠は何も言わず、返えされてしまう。なぜ一生懸命書いたのに、朱を入れてくれないのだろうと帰り道よく考えた。それでも書くしかないと思い、一日百枚づつ書くことにした。その後師匠が朱を入れてくれるようになったとのことであった。

(ホ)空海を知る

空海は下書きはしなかった。

心で推敲し、そして念じ、筆を執るときは、それが清書であった。その例として、「商量」とすべきところを「量商」と誤記し、レ点を施している故に、書き直してはいない。空海は草書、雑体書と種々のものをこなし、素晴らしいものを現代に残してくれた。これから空海を勉強される方は、是非、性霊集を読むとよい。(性霊とは自然や人間によって触発される文学的感動を意味する。)

(ヘ)本物の書作家

書が売れるようになるには、プロとしてアマチュアとの間に、格段の差が必要なのではないか。お金があれば、買いたいと思われような書を書く。それが本物なのではないか。そして、手紙文が書けるようになれば一人前ではないか。真剣勝負の一発勝負になるまでが大変なことである。

(ト)終り良ければ全てよし

空海の終筆が実に見事である。書作する場合、最後の締めくくり(着地)が最も大切である。

実技

昼食の後、午後一時から、前中の有意義な講話をお聞きし、

各受講者の心が熱く燃えてきたところで半紙に書き始めたことと思う。一列づつ懇切丁寧に添削指導を受けた。その後、受講者は先生の周囲に集まり、先生の範書が始められた。条幅にそれは大河の流れのごとく、身体全体で超長鋒の筆を、巧みに踊らせたかと思うと、紙を切るような鋭い筆致での臨書であった。受講者は真剣な目で、その鋒先を追っていた。次には、かなり使い込んだと思われる、墨場必携を取り出し、風信帖の倣書がなされた。受講者一同感銘を受けた。

その後、野口白汀先生を囲み、受講者と懇親会が行なわれ、楽しい一日を過ごした。最後に思い起しながらの拙文、お許し願いたい。



第五回

栃木県書道連盟女流展

63年2月26～28日

栃木会館 階上ギャラリー

いつのまにか五回を重ねて参りましたこの書展も今回は昨年よりも多く六十四名の出品でした。連日不安定な天候にもかかわらず多くの観覧者で賑わいました。

出品作品も「漢字あり仮名あり少字数ありとバラエティに富み会場を楽しく観覧できた」と足を運んで下さいましたある先生のお言葉でした。毎回批評会での先生方のご指導の賜と存じます。改めて感謝申し上げます。

この定着して参りました批評会は最終日七海水明先生をお迎えいたし長時間にわたり厳しくも暖かいご教示を頂きました。又今回は会期前に各々の作品の制作意図をハガキにより七海先生まで提出いたしましたのでいままでとは一寸違った鑑賞会

(七海先生曰く批評会ではなく鑑賞会にする)になりました。この制作の意図を記することに

より改めて作品を作ることの難しさを感じた者又は意図と書き上がったものが違ってしまった者等それぞれがそれぞれの勉強をさせて頂いたのではないかと思います。

この女流展がお互いに切磋琢磨磨し一つの格のある展覧会として育って行きますことがこの企画を提案し実現して下さいました連盟の方々のお礼と存じます。女性会員のご精進をお願いいたします。

次回も「いい作品」と「いい笑顔」で皆様にお目にかかれますよう祈りつつご報告といたします。

(山中香葉)



昭和62年度新入会員

氏 名	雅号	住 所	生年月日	職 業	電 話
平 山 芳 之	芳園				
柴 崎 和 子	梨舟				
天 川 隆 一	禅峰				
藤 沢 美 智 子	翠待				
小 倉 光 一	龍雲				
東 峰 静 子	静華				
田 口 裕 子	風月				
田 中 弘 子					
佐 山 麻 次	朝而				
齋 藤 貞 寿					
高 松 光 男	雄鶴				
寺 内 進					
川 内 昭 子	桂苑				
住 所 変 更					
平 山 タ マ エ	尚香				
君 島 時 幸	夏雲				
赤 沢 豊					

第一回研修旅行

良寛の遺跡めぐり

本連盟は、研修旅行の目的で、五十八年夏、六十年夏と「栃木県書道連盟中国研修旅行団」を結成して友好訪問し成功を収めた。その後会員各位から訪中もよいが、会員が気軽に研修できる一泊二日程度の見学会を企画してほしいとの声が多く聞かれました。

幹事会・運営委員会等で営々検討を重ね、昭和六十一年度総会において、一泊二日による研修旅行を実施することが承認された。

アンケート調査により新潟方面「良寛の遺跡めぐり」と決定。

昭和六十二年七月二十六日(日)・二十七日(月)一泊二日の研修旅行を実施した。

行程、七月二十六日(日)JR宇都宮駅西口出発(東野観光バス)―東北自動車道―関越自動車道―出雲崎―良寛記念館―木村家(良寛維宝堂)―国上寺・五合

庵―弥彦神社―弥彦温泉泊(弥彦グランドホテル)懇親会。

七月二十七日(月)越後七浦シーサイドライン―会津八一記念館―北方文化博物館(豪農の館)―東北自動車道―宇都宮帰着。東野観光バス新車内サロンでの



懇談。

旅の楽しみは宴の楽しみとか、早くも越後の酒に、日本海の新鮮な魚に思いをはせる。

良寛維宝堂内で木村元周氏の説



明に聞いている会員。

木村氏の熱弁良寛様の書には非常に偽物が多いから先ず偽物ではないかと疑ってかかる位の心構えが必要である。そして必ず並べてみる。良寛様の書には昔から名品として阿部・解良木村の三家に大切に保存してあるものがあるから必ずこれ等の作品と並べて見られることが大切。写真でよいから並べてみる。と解説があった。



五合庵。

五合庵は国上の中段に建立された国上寺へ通ずる西坂の中段にある小さな庵で、新潟県文化財の指定を受けて、永久保存の庵である。

弥彦グランドホテル。
懇親会は、カラオケ、
民謡、隠し芸、日本交
通公社提供の福引等が
あり夜のふけるのを忘
れるほどの盛況であつ
た。



本連盟が企画した一泊二日の
研修旅行は、参加全員のご協力
と添乗員我妻氏の温い心使いで
実り多い旅ができました。
最後になりましたが、この研
修旅行に際し、川俣古舟、高橋



会津八一記念館見学。
月曜日は休館日であつ
たのを無理なお願いを
して私達のために開館
して下さいました感謝、感謝。

日傳、七海水明各先生並に、松
島堂様、日本交通公社様より過
分のお心づかいをいただきまし
た事を記して厚くお礼申しあげ
ます。

(重原聖鳥記)

中 社 だより

栃木県篆刻連盟設立

第一回篆刻公開講座開催さる

近年、趣味としてあるいは市
民講座等で広がりつつある『篆
刻』のブームはここ栃木県にお
いても徐々に現われてきている
ように思われます。

『篆刻』は確かに、印判(は
んこ)とは一線を画した特性を
持ち、必修とされる文字学やら
篆書の運用筆法等、一朝一夕で
は成し得ないやっかいなところ
があります。しかし、『篆刻』
が持つ「方寸の世界に胸懷を遊
ばしむ」楽しみは、他では味わ
えない大きな魅力だと思います。

これまで、この魅力に取り付
かれた県内の好事家は決して多
くはありませんでしたが、ブー
ムの広がりにつれて関心を持つ
人が増えてきており、実に喜ば
しいことです。

さらには、長年県内の篆刻家
の中で描かれてきた、篆刻界の
質の向上と流派を超えた大同団
結が、紆余曲折を経てようやく
『栃木県篆刻連盟』という形で
実現する運びと成りました。こ
の設立に至るまでに、多くの書

道の先生方のご協力をいただい
たことを深く感謝いたします。

尚、役員は次の通りです。

会長 新井幽秋 副会長 菅

又藤舟・丸山曉鶴 事務局長

岡本清秀 事務局 安藤磨紀

大浦涉之・益子翠茗 監査

井上郡洞・吉田芝更・渡辺柳翁

現在、会員を募集しております

ので、興味のある方は是非お

声を掛けていただけたらと思い

ます。

また、生れたばかりの会で、
これから活動をはじめのわけ
ですが、早速、栃木県篆刻連盟主
催による第一回篆刻公開講座を
企画しましたところ百名近い受
講者が集まってくださり、盛況
裡に終えたことを衷心より感謝
いたします。

今後ともご指導ご鞭撻のほど
よろしくお願いいたします。



昭和六十二年

[illegible]

[illegible]

	二	三	五	五	五	五	二	二
	二六―二八	一四	二〇―二三	一九	一一	一二	二二	二五
・批評会のこと ・実技講習会懇親会のこと ・栃木の作家たち88(作品展)のこと 書出品一九名 ○協議事項 (1) 会員展批評会講師のこと 係のこと (2) 総会運営の役割 (3) 総会までの仕事の分担 女流展作品搬入並に展示作業 第五回本会女流展 この展覧会の企画運営等については左記八名の方に代表として協力をお願いした。(順不同) 小滝きみ・荒井雅子・人見翠苑・山下スミ・山中香葉・齊藤美与子・斉藤和子・菅原芳雅 ○栃木会館ギャラリー上下 ○出品者 六三名(女性会員一三八名) ○入場者 四百余名 ○批評会講師 七海 来年度研修旅行についての話し合い ○交通公社二人と本会から七海・重原 ○二方面位の案を検討したがもう少し研究してみようということになったが総会には会員にはかされるよう手配すること。 会員展作品搬入 午後一時〜正午 栃木会館へ 作品展示作業 午後一時〜四時 会員展 栃木会館ギャラリー上下 ○出品点数(点) ○入場者数約(名) 批評会 午前十時〜正午 ○講師 書道評論家田宮文平先生 〒350-113 (狭山市入間川一三三一―一五〇六) 総会 ○ホテル丸治 午後一時から二時まで ○終了後懇親会 作品搬出 ○午後四時から五時まで								

年度内会員関係書展一覧

(県内で開催されたもの)

年	月	日	書 展 名	主 宰 (会長)	会 場
62	6	11～14	は な ぶ さ 会 書 展	七 海 水 明	栃木会館ギャラリー(上)
	7	2 ～ 6	霊 心 会 書 展	小 川 仲 秋	東武デパート (5 F)
	〃	3 ～ 5	玄 殊 会 書 展	丸 山 暁 鶴	栃 木 市 文 化 会 館
	〃	3 ～ 5	理 玄 社 書 展	墨 池 会	栃 木 会 館
	〃	26～30	素 心 社 書 展	中 井 史 朗	栃 木 会 館 (上下)
	8	1 ～ 3	星 山 社 書 展	津 久 井 汀 舟	栃 木 会 館 (上)
	〃	6 ～ 8	東日本書道会書展	中 野 永 峰	栃木会館・東武デパート
	〃	22～25	高根沢町書道連盟書展	高 根 沢 町	栃 木 会 館 (上)
	〃	27～31	下 野 の 書 展	下 野 新 聞 社	東武デパート (5 F)
9	5 ～ 7	興 玄 社 書 展	宇 留 野 天 外	栃 木 会 館 (上)	
	〃	〃	栃木市文化祭書道展	栃 木 市	栃 木 市 文 化 会 館
	〃	10～12	抱 玄 社 書 展	墨 池 会	栃 木 会 館 (上下)
	〃	18～20	筆 邑 会 書 展	上 野 鶴 陽	小山市文化センター
	〃	24～27	頂 門 会 書 展	高 橋 竹 瑞	栃 木 会 館 (上)
	〃	23～10/2	県 芸 書 道 展 覧 会	県文化協会・美術館	栃 木 県 立 美 術 館
10	15～20	かなのすがた展(個展)	百 目 鬼 覧	東武デパート (7 F)	
11	2 ～ 4	書友会栃木蘭契社書展	斉 藤 笙 風	栃 木 会 館	
	〃	7 ～ 8	猶 興 社 書 展	川 上 尚 雲	大田原商工会議所
	〃	14～15	抱 原 会 書 展	酒 井 真 沙	大田原光真寺会館
	12	5 ～ 6	栃木県篆刻会作品展	菅 又 芦 舟	栃 木 会 館 (下)
63	1	21～25	栃 日 会 展		新うえの 8 F 催事場
	〃	29～31	清 明 会 書 展	中 野 永 峰	栃 木 会 館 (上)
	〃	〃	天 遊 書 個 展	癸 生 川 天 遊	栃 木 会 館 (下)
	2	25～27	河内町書道部会展	河 内 町	栃 木 会 館 (上)
	〃	26～28	栃 書 連 女 流 展	栃木県書道連盟	栃 木 会 館 (上)

(記載に漏れがありましたらご容赦下さい。)

編集後記

風薫る好季節。野に山につ
じの花が真盛りです。

お多忙のところ各先生方には、
玉稿をお寄せいただきまして誠
にありがとうございます。お
陰様で、第八号会報がお届け出
来るはこびとなりました。

「お願い」、お忙しいことと思
いますが、各方面で、ご活躍の
先生方社中展、その他催物等が
ございましたら、本部宛、催物
の記事などお送り願えれば幸で
す。

その他何んでも結構です。お
気付の事がありましたらお便り
下さい。
編集子

